聖母女学院短期大学
同窓会々報
題字揮毫：奥村一郎
発行所
聖母女学院短期大学同窓会
〒612 京都市伏見区深草田谷町1
聖母女学院短期大学内
電話（075）643-6781
FAX（075）643-8786
編集発行
聖母女学院短期大学同窓会

今、心ひとつに

「親友求めます」の広告

家政一回卒
同窓会会長　岩田英子

同窓会員の皆様如何お過ごしでしょうか。昨年9月に創刊号を発行いたしました。短期大学創立に貢献なさいました故Sr.小野先生の御遺徳を偲ぶ特集を組みました。Sr.小野先生のお教えとお導きが今も私達同窓生の心の中に生き続けていることがうれしく、なつかしく思われました。

最近、他人の生命や心をなんのためらいもなく傷つけ、時には奪ってしまう理不尽で残忍な事件が身近で起きています。特に小さい子供達がいるご家庭では「他人を信じないで」と繰り返し教え人間不信にさえ陥っているのではないでしょうか。人間の心の中には「神の愛」が育まれているはずなのに「悪魔のヴィールス」に如何にして蝕ばまれてしまったのでしょうか。私達はこれまでにたくさんの人と出会いにより人とのかかわり方を教えられたり、経験によって体得してきました。友達同士・近隣同士、社会の中で「我」を活かして暮して行く方法を学んできました。背筋に冷たいものが走るような人の「心」や「行動」はどのような状況で生じるのでしょうか?

先日、テレビの特集番組を見ていますと「親友を求めています」と雑誌に広告を載せ、手紙やポケットベルに通信してくる親友候補生を、心待ちにしている20～30歳代の若者達のことを知りました。彼らは真剣に親友が欲しいと願い、最初のうちはポケベルで交際しているそうです。しばらくすると音信不通になってしまい、再度広告を出し新たな機会を待っているという内容でした。

若者達の多くは一日の大半をテレビゲームやパソコン等の画面に向って過しているようで、体を動かし汗をかいて時間が過ぎるのを忘れて遊んだ経験があるようには見えませんでした。彼らは内向的な性格で他人とのかかわりあいは煩わしく面当くさくて嫌だったそうです。しかし、今となっては何んでも話せ、自分を理解してくれる親友を強く求めているそうです。年齢・世代の違いはありますが皆様はどのような方法で親友を得られましたか。雑誌の広告で得られるようなものでしょうか。おたがいの長所短所を認め受け入れ、心を許しあい親友となっていったのです。私は、彼らの欲求が自分勝手で相手の立場を考える余裕もない人のように思え理解できませんでした。親友に限らず人とのかかわりは、自分の都合の良い時にスイッチを入れ、クリックで好みの画面に変える。こういう風に操作できるものなのでしょうか。

同窓会報発行の趣意には会員皆様と母校との掛け橋となり、情報交換の場所としてあげましたが、より多くの人達の心の交流、友人との絆の強さを確認する場として積極的に活用していただきたいと思います。クラス会・勉強会・その他近況報告等の紹介記事の皆様の投稿をお待ちしております。

会報二号に御投稿下さいました方々、ありがとうございました

塞翁馬

生活科学科教授　松本紀代子

同窓生の皆々様には恙無くお過しでしょうか。「私も」と言いたいところですが、折悪しくも春休みの終末に、風邪を拗らし入院する羽目になりました。

入院とはいえ軽症で、手術をする訳でもなく、大層な検査があるでなし、上膳据膳の二週間余を経験しました。

振り返れば、家政学を専攻する者の気負いと、鍵っ子への親心から、私なりに家庭を重視し、健康にはこだわってきたつもりでした。しかしそれも、娘達がそれぞれに独立した気の緩みと体力の衰えが加わってか、ここ数年、不健康な生活だった様に思われます。

バランスの取れた食事・適度な運動そして休養が健康の条件であることは、誰しもが知るところですし、私も頭では理解していたものの、現実には、その基盤が崩れかけていたと言えます。

その意味で今回の入院は、生活の基本の基本を問直す好機となりました。

また、患者の方達から、発病の原因にストレスが大いに関与している実態を伺い、柔軟な心や、共に分かち合い語り合える友が、ストレス社会には益々必要なことも実感しました。

日本は今や世界一の長寿国となりましたが、時間的な量ではなく、如何に充実して人生を過したかの質が問われています。若い頃からの健康への正しい自己管理が求められましょう。

入院中は周囲の方々に多大な迷惑と犠牲を強いることになりましたが、人の温情に感激し、また、弱者の立場で自己内省出来た点でも、恵みの時であったと感謝して居ります。

最後になりましたが、同窓生の皆々様の益々の御健勝とご活躍を祈って居ります。

近ごろ思うこと

児童教育学科教授　萬英子

昭和43年4月、わずか80余名の新しい一回生を迎えて児童教育学科が発足した。歩くとギシギシと鳴る古い木造の学舎の中で、若い新入生の顔は輝いていた。今思うと、あの時が今日ある児童教育学科の第一歩だったのである。私は、将来すてきなお母さん、或いは、子供達に愛され慕われる小学校や幼稚園の先生を目指す人達の為に、又新しい聖母の歴史を造る為に、若い人達と一緒になって、何もかも手さぐりの状態で一生懸命であった。授業や放課後の学生たちとの交流を通して「聖母に入学して本当によかった」「楽しい学生生活が送れた」と満足感を持って社会に出ていってくれる事を願いながら……。名前は勿論のこと、その学生の特徴までしっかり把握し「今、何か悩んでいるのでは、一寸元気がない」、「将来の方向も自分で選び、それに向って邁進する程元気になってくれた」等と一人一人の事がよくつかめて、私にとっては充実した毎日であったような気がする。

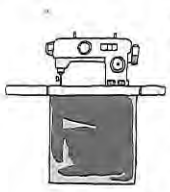
年々、月日の流れの早さに驚かされるのであるが、発足から今年で29年の歳月が流れたのである。その間、香里にあった家政学科(現生活科学科)が藤森にキャンパスを移し、四階建ての新学舎や、マリアンホールが建ち、国際文化学科が設立され、聖母も大きく成長した。外的条件も大きく変化したが、学生の気質もそれ以上に激しく変化して来ている。「先生、私の娘が聖母短大に入学しましたのでよろしく」となつかしい電話を頂いたり、町角で「お久振り!!」と越えをかけられたりするが、その度に私は、昔の彼女達の授業での真剣なまなざしを思い出すのである。「ピアノは難しくて苦手です」「音楽の時間は緊張します」「よく練習してたのに先生の前に来ると普段の力が出ないんです」等といって戸惑いながらも一生懸命だった姿。何事もやればできる。「ピアノの練習は大変な時間が必要となるので、アルバイトが出来なくなりそうです」「早く弾けるようになるコツを教えて…!! インスタントで弾けるようになりたい…!!」という言葉を、無邪気に言い合っている今の学生をみていると、〝貴女達の先輩達はもっと苦労してそれを乗り越えていたのに…〟と心の中で叫びながら、ふと先程の『ラク・スグ・トク』という、まるで三拍子のような若者気質話を思い出すのである。それでもやはり私は音楽の美しさ、奥深さを少しでも味合って子供達の豊かな感性を育ててほしいと願い、又今日も厳しい(?)ピアノの授業に向かうのである。

ミシンと裁縫

国際文化学科教授　大森和彦

我が家にはミシンが一台ある。20数年前にアメリカで求めたもので、当時としては最新のシンガー電動ミシンであった。子供では持ち上げられないほど重く、頑丈そのものである。求めたときは、よく使っていたようだが、ここ10数年は全く使われていない。その理由を家内に聞いてみる。自分の気に入った服が既製服で簡単に手に入るようになり、自分で衣服をつくることなど考えたこともないとの返答が返ってきた。これが一般的な日本の家庭の実情のようである。既製服は工場の工業用ミシンでつくられる。日本では家庭用ミシンの存在理由が無くなりつつあるのであろうか。

青年海外協力隊の活動を紹介するテレビ番組で、アジアの途上国で現地の女性にミシンの使い方を教えている場面を見たことがある。家庭用ミシンは、今や、途上国でその本来の機能を発揮し、女性の職場創造に一役買っているのであろう。かっては日本の家庭で使われていたミシンが、今や途上国の家庭で使われるようになり、日本人は自分でつくることを止め、途上国のミシンで作られた既製服を買うようになったのである。日本の経済大国化は家庭用ミシンの歴史の中にも現れる。経済的には富と技術の波及効果で、途上国の経済発展に貢献しているのだが、モノづくりを忘れた日本は、これでよいのかとの疑問もわいてくる。



谷喜雄先生の退官にあたって

感謝の言葉

谷　喜　雄

これまで他人ごとのように思っていた定年を迎えて、にわかに昔のことを思い出すようになりました。聖母に勤務して二十六年、香里、京都それぞれの時代の思い出は尽きませんが、何とか大過なく勤められたのは教職員の皆様のご支援のおかげと感謝しています。この間、いろんな出来事がありましたが、短大としての大きな事業の一つは家政学科の京都への移転、児童教育学科との統合ではなかったでしょうか。移転については、当初、学生、父兄の反対もあり、結果として予定より一年おくれて実現しました。大学の移転には官公庁の認可が必要です。当時の社会情勢から認可が難しいという情報もありました。すでに両学科を収容する立派な新学舎が完成しています。もし認可されなかったらどうなるのかということが心配の種でしたが、これが杞憂であったのは幸いでした。つぎの問題は如何にして両学科をスムースに統合するかということでした。

違った土地でそれぞれ別々に育った両学科は規程にも習慣にも大きな違いがありました。

諸規程作成委員会が発足し、統一規程の作成にとりかかりましたが、聖母で私が最も苦労したのは委員長としてのこの頃でした。しかし両学科委員の良識ある協調と熱意のおかげで曲がりなりにも完成できました。現在の規程はいくらか改正されたり追加されたりしていますが、このときに作成した規程が骨子となっていることに満足しています。この苦労のおかげで、すべての規程を身をもって熟知することができました。これが後に学長としての対応にどんなに役だったか分かりません。学舎建設から統合に至る一連の流れの中で松中理事を中心とした建設委員会、統合委員会の貢献を忘れることはできません。連日深夜まで討議された労力は大変なものでした。だんだんとこの御労苦を知る人が少なくなり感謝の気持ちが薄らいでゆくのは淋しい限りです。指導面では私の専門の関係上食物栄養の科目を担当しました。良い学生に恵まれ充実した講義ができたことが何よりの喜びです。大学祭、学外実習、研修旅行などの思い出も数多くあります。先日、私の定年にあたって在任期間に食物栄養を卒業した方々が集まって私を囲む会を盛大に開いて下さいました。東京、広島、九州、北陸などから、わざわざお越し頂いた方もあり頭の下がる思いでした。それぞれの時代の思い出を語り合い楽しい時間を過ごすことができました。二十六年間、更にこれからの日々聖母は私の全てであると思い厚く御礼申し上げます。有難うございました。

聖母短大と谷先生

大阪女子大学名誉教授
神戸女子大学名誉教授　松　本　博

私はこの大学に伺う度に身の引きしまる感じを持った。香里の学舎のときも又今の深草の学舎でも、建築の設計者がそのように意識して設計されたのか、大学を管理しておられる方々が行き届いた整備をしておられる為か、とにかくだらしない心と服装では門をくぐれない感じである。

しかし一歩中に足を踏み入れるそれは又一転して我が家に帰って来たというようなアットホームの雰囲気で先生方は私を迎えて下さる。初代学長近末貢先生、谷喜雄先生、三浦賜郎先生、近末先生の門下沢田寿々太郎先生、第一期の卒業生山田幸子先生、とにかく私にとってはこの大学は知人が多く他のもろもろの大学とは異った特に親近感を強く感じる大学である。

その原因としてまず思いうかぶのは初代学長で大学の創設に当たられた近末貢先生と私の関係で、昭和一九年(一九四四)陸軍糧抹廠時代からあとずっとご指導にあづかり公私にわたるお世話を頂いた方であったということ、その他数え上げれば数々のことがあげられる。

この近末先生のあとを継がれた谷先生、先生にお目にかゝっているといつの間にか近末先生のようなイメージになってしまって学会や会合でお目にかゝる毎に親しみを感じるようになってしまった。現在も図解食品加工学の共著者グループとしてご親交を得ている。

谷先生に対して私が最も敬意を表したいのは、大学の教授と研究活動を両輪としてバランスよく推進されたことで、特に学究的雰囲気を研究室に盛り上げられたことを頭の下がる思いで拝見し又感謝申上げて来た。というのは私の知人友人二人が先生のもとで博士論文をつくり上げたというううれしく感謝の外はない事実を記しておきたい。

近来先生によって創設された聖母女学院短大の建学の精神が谷先生を始め歴代学長先生・教授陣によって受けつがれ、高貴なイメージによって包まれた大学の学舎と、その中に充満しているキリスト教的あたゝかい雰囲気によって育ぐくまれ、この大学が益々発展することを信じ、谷先生の定年ご退職へのはなむけのごあいさつと致します。永年の大学へのご貢献に感謝し、ご健康に今日の日を迎えられることをお慶びしつつ。そして大学に伺っても先生にお目にかゝることができないちょっぴりのわびしさと共に。

(友人代表)

誠実で温厚なお人柄 谷先生に感謝申し上げます

生活科学科学科長　長井満里子

本学に二十六年間ご在職中、九年余を学長職としてご尽力下さいました谷先生に、心から感謝申し上げます。言葉では言い尽くせない先生の存在の大きさと温かさを、今しみじみとかみしめています。

応用微生物学の研究者としてご活躍中の、四十代に入られたばかりの先生をお迎えした、当時の家政学科にとっては、まさに新風を得たことでした。学生に冗談まじりで「仏の谷です…」と自己紹介される時の先生は、本当に仏のような温顔に見えたものです。しかし、ご自分には厳しく、物事の整理能力は抜群だと、もれ伺いました。緻密な思考と行動力があればこそ、家政学科に新しい方向性を模索し、当時としてはユニークな食物文化コースを設置し、家政学科と児童教育学科の学舎建設による統合、さらに、国際文化学科の新設とそれにともなう学舎の増設等を着実に実現されたのです。大学は組織ですから組織を統率するトップとしての手腕と教職員の協力を得る心情がなければ、物事は動かないのですが、先生の誠実で温厚なお人柄が物事を無理なく進められたのではないでしょうか。私共の計り知れないご苦労は、当然あったとは思いますが。

また研究の面では本学一期生の山田幸子先生を、農学博士取得にまで導かれ、この指導力が後に続く多くの同窓生のはげみになっていることと思います。

寡黙な先生は静かに本学を去られましたが、先生の存在そのものが大きな力であったとこゝに深く感謝申し上げます。

「谷喜雄先生の御退官を祝う会」の御報告

家政十回卒　橋場　説子
(旧姓　川端)

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。私達食物系の卒業生にとっては大切な恩師であり、また本学全体にとりましても、長く学長職を務められました谷喜雄先生が、今年三月末をもち、退官されました。先生の永年に渡る御功績に、少しでも恩返しをしようでは、ということで、谷先生にお世話になった十期生以降の食物系を中心に、「御退官を祝う会」の案内状を差し上げました。私達有志もこのような事はなにぶん初めての経験であり、皆様がどれだけこの呼びかけにお答え下さるか、不安なままにスタートいたしましたが、最終的には九十名の方がお祝いの会に御出席下さり、また二三八名の方が記念品に御賛同下さいました。

「御退官を祝う会」は五月十八日(日)に京都・都ホテルにて開催させていただきました。当日は、会の趣旨にふさわしく、少し汗ばむくらいの初夏の陽気の中、はるばる埼玉・東京・石川・鳥取・広島・福岡よりお越しの方をはじめ、なつかしい卒業生の皆様に再びお目にかかることが出来まして、本当に嬉しい限りでございました。学年を越え、永い年月を越え、自然にタイム・スリップが出来るのは、聖母の持つ家族的な雰囲気なればこそ、と思いました。御歓談の合間をぬってお願いいたしました、皆様と谷先生との思い出話や、谷先生の変わらぬ穏やかな語り口の御挨拶に、思わず時代の流れを忘れて、学生時代の自分に戻り、まるで懐しい教室で講義を聴いているような気分に浸ったのは、私一人ではなかったと思います。また山田幸子先生が、スピーチの最後に思わず一瞬涙ぐまれましたのを拝見していて、先生が谷先生とスクラムを組み、短大の為、学生達の為、そして御自身の研究の為に、足並を揃えてこれまで歩んで来られた年月を感じまして、私自身も思わず目頭が熱くなりました。

今回、主にお骨折りいただいた第十一期卒業生の有志の皆様、御苦労様でした。皆様とは学年を越えて、本当に楽しくお仕事させていただく事が出来ました。

谷先生は、今後も週一回の割で、聖母にお越しいただけるそうです。うれしい事ですね。先生の御活躍をお祈りいたしまして、御退官を祝う会の御報告とさせていただきます。

「ボビンレースへの道」

家政三回卒　光平一子

一九八二年、ボビンレースを学びたい熱い思いに胸こがし、未知の国へ旅立った。

ボビンレースに関する知識がなかった私が、始めた切掛は、道具からである。Sr.小野先生の研究室にあったSr.アニエス先生の遺品の中に、大変糸の絡んだ棒状の物があった。「これはなんだろう」と思いながら、糸を解してみたがどうにもならず、棒状の物だけ残そうと鋏を入れかけたとき、Sr.小野先生が来られ「ほれ、今の若い者はどうなっているのかも調べずに切ってしまう」と注意を受けた。これが私とボビンレースの出会いである。

ベルギーの習慣・文化・言葉やヨーロッパのどの位置にある国かも知らず、ただボビンレースを学びたい一心に、毎年夏に、二ヶ月ベルギーを訪れてはや15年が経つ。

最初の五年間は、ペギン修理院のレース学校でお世話になる。あの頃の学校は、閉鎖的でありこちらの人のペースに合わせて決して焦らずに習うようにと、アドバイスを受けた。日常語はフランス語とフラマン語(オランダ語より柔らかい感じがする)で、先生もクラスの人達もフランス語で会話する。何をいっているのかまったく理解出来ない私の耳に、時々「ヤパン」と聞こえる。「きっと私の事だ」と思い行儀は悪くないか、失礼なことはしていないかと大変緊張したのを覚えている。一週間程過ぎたころ「イチコ、イチコ」と名前を呼ばれ親しくしてもらえるようになるが、やはり会話には入れないので「ヤパン、ヤパン」が耳に入ってくる。今度は私のことを褒めてくれているのかもしれないと思えてくる。ずいぶん勝手なもので本当は逆だったのかもしれない。

四年目から、特殊なテクニックの夏期講座が始まり、中世のレースの復元や糸の動き、織り方などを学ぶ。この講座にはヨーロッパ各地からの生徒が集まった。生徒といっても自国では既に、ボビンレースの指導者であり私のような未経験者はいなかった。思い返してみると怖いもの知らず、もう一度おなじ経験は絶対に出来ない。

ベルギー人のアニタは私を娘の様に可愛がって下さり家族の一員としてこの十年親身にお付き合いをしている。昨年の暮れにダムの市庁舎で開催された展示会に、日本人で初めて作品を展示して頂き、市長・先生・友人達に褒めてもらった。親代わりのアニタはとりわけ喜んでくれた。

一九九五年には日本ヴォーグ社より、恩師、賀永マキ子先生に助けて頂き「ボビンレースの基礎」を出版することができ、また、三年前にはOIDFA(世界レース機構)の日本代表に選出された。昨年のフィンランド大会では各国の代表・評議員に「良い仕事をした」と評価してもらった。

素晴らしい人達との出会いと愛情に支えられ私は「ボビンレースへの道」を歩み続ける事が出来た。ボビンレースによって得られた「友人」は私の大きな財産。少し認められた分、精進・努力しなければ成らない。これからが本当の始まりだと思っている。この仕事に入る切掛をつくって下さったSr.小野先生に感謝している。

私の学生時代

京都市立北白川小学校教諭　児童二回卒　岩井清美(旧姓 竹岡)

今から二十八年も前のこと、さぞや古ぼけた思い出だろうと思われそうだが、とんでもない。たった二年間の学び舎であるが、そこで過ごした日々が、色鮮やかに甦ってくる。

始業時刻より早めに学校に着き、藤の森教会で数人の仲間と朝の祈りを唱え、いそいそと学舎へ向かう私。なんと真面目な学生であったことか。

ピアノとは縁の無かった私は必死でピアノ室を確保し、動かない指を恨みながら、ツィグラーの譜面とにらめっこ。つらかった七面山までのトレーニング。『あ・い・う・え・い・お・あ・お』と恥じらいながらもくり返し発声練習をした老教授の律義な授業。美術クラブでのスケッチ旅行。一枚も記念写真を撮らなかったが、あの仲間は今頃どうしているのだろうか。

一年間に確か四十四単位を取ったように記憶するが、朝から晩まで、びっしりとつまった授業を受けていた。喫茶店で駄弁ることすらほとんどできなかった。シスター安藤先生のフランス語のための予習ノートは、私の大切な思いでノート。本棚の背表紙のセロテープが今にもパリッとはがれ落ちそうなツィグラー三巻。厳しい萬先生の声が聞こえてきそう。こうして書きながら思い出す授業の一こま一こまは、やはりみんな二十八年前の嬉嬉とした青春の顔。

しかし、当時はまだベトナム戦争時代。北爆のニュースが流れたり、学生や市民運動が激しく展開されていた。けれど師団指令部や兵舎だったと聞いている学舎では、そんな世相とは無縁のような静かで穏やかな学校生活がくり返されていた。それは都会のオアシスか温室のようだとも言える。とにかくその二年間をベースに、二十六年目の小学校教師生活に至る。それに二十年の結婚生活を重ね、なんとか続けられた。

じっくりと遠い日々を丁寧に思い起こしてみると、とても分厚い日々でした。

ついこの間、帰宅途中の白川通りで今江祥智先生をお見かけしました。懐しい顔です。

二つの国で学び、そして得たもの

京都都ホテル勤務　国際一回卒　奥山和子

今回、この原稿を書くにあたってとても懐しい方よりお電話を頂きました。この場を借りてまずその方にこの様な機会を私に与えて下さった事に対してお礼を申し上げたいと思います。

時が過ぎるのは本当に早いもので、私が国際文化学科の一期生として母校を去ってからもう八年もの年月が過ぎました。卒業後の八年間は本当にあっという間でした。現在はホテルのフロント課ゲストリレーションとして勤務し毎日多忙な日々を送っています。仕事の上で、在学時代に受けた聖母での教育が、今の私を形づくる基盤となっていると信じています。

英米文化を専攻、卒業後渡米し、四年制の女子大学三回生として編入する事ができました。

この恵まれた機会を作って下さったのは言うまでもなく、聖母の恩師の方々であり、実際、留学に伴う様々な繁多な事務を親身になって助言して下さいました。

米国で過した約二年間は楽しいだけのものではなく、言葉の壁も含めて一人で生活していく事に伴う色々な苦労がありました。毎日毎日を過していく事だけが精一杯であり、涙、涙の日もありました。が、在学時代の教え、「物の違いは善し悪しではなく、単に異るものとして、あるがままを受け入れる」という教育を受けた私は、様々な国の人との出会い、異なる生活習慣、文化、考え方に自然に何の抵抗もなく入っていけました。特に自分をしっかりともち、自分の意見をはっきりと主張しないと生きていけない米国社会に於いても、苦労が少なかった様に思います。

又、素直に自分の喜びを表現し、手伝いを必要とする人に対しても自然に、何の衒いもなく歩みよるという米国の率直さも良い勉強になりました。

まだ、自分自身の価値観が定まらぬ時期に、全く異る社会の中、文化の中で、この様な体験が出来た事は、現在の私に大きな影響を与えていると思います。

現在の仕事を選んだ事も仕事を通じ、国際人として人々とかかわり合い、米国で受けた言葉では言い尽くすことのできない大きな親切を、何かのかたちで誰かにおかえししていきたいとの思いからです。

実際、私の就いた仕事はサービス業で、これ以上という事もない中で、ホテル滞在中、いかにお客様に喜んで、満足して過していただけるかを毎日毎日模索し、仕事をしているに尽きると思います。ホテルを去られる時のお客様の笑顔、小さなはげましの言葉が、今まで私を支えてくれたと思っています。

ある人の言葉、「人と人との出会いが、これからの貴方にとって財産になって行くでしょう。」は、今も心に大きく響いています。

日本と米国、豊かな学生生活を過ごす事が出来たお蔭で、現在の私があると信じ、この事に心から感謝しています。仕事上、日本の人、世界中の人、色々な職業の人と出会うことの出来る私、今まで色々な人から教えてもらった事、助けてもらった事を忘れずに、今度は、私が出来る小さな事から一生懸命、お返ししていくつもりで出合いを大切に毎日毎日を過ごして行きたいと願っています。

ゆりの会 第一回ゴルフコンペに参加して

家政三十二回卒　古谷咲子

昨年第一回同窓会誌の隅に見つけたゆりの会コンペ。幹事の方が友人のお母様という気安さもあって、早速申し込みをさせていただきました。

わくわくしながら迎えた当日は最高のゴルフ日和に恵まれ、楽しい一日が始まりました。まずクラブハウスに足を運びますと、かつてお世話になった山田先生に久方ぶりにお会いし、楽しくお話を伺うことができました。また、御参加された他のメンバーの方々は、初めてお目にかかった大先輩方ばかりでしたが、聖母という共通のプラットフォームのもとで、私のような腕前の者でも暖かくつつんで下さり、まことに楽しく素晴らしい一日をご一緒させていただくことができました。心より御礼申し上げます。

このような楽しい集いに多くの同窓生の方々が参加され、本会がさらに発展を続けることを衷心よりお祈り申し上げます。

第2回『ゆりの会』ゴルフコンペ開催

(同窓会会長　岩田英子)

○日　時　平成9年9月26日(金) 9時30分集合
○場　所　枚方国際ゴルフ倶楽部
枚方市津田4546番地
TEL 0720-58-8311
○申込み締切日　平成9年9月20日(土)　幹事まで
○費　用　参加費 3,000円　賞品・会食費等
(プレー費・昼食代は個人負担)
○幹　事　熊谷穎子　TEL 0720-47-7317
山口淑子　FAX 0720-43-0789

住所・名前の変更をお知らせ下さい

ご住所及びお名前がかわられたかたは、お手数ですが、短大同窓会まで**お葉書にて**ご連絡くださいますようお願い申し上げます。その際、宛名ラベルのお名前の下に記載しております番号を必ずお書きください。また、**卒業年度、学科、クラス、旧姓**なども明記して頂きますよう宜しくお願い致します。

〒612
京都市伏見区深草田谷町1
聖母　花子　様
番　号→ (123456-789101-112-13)

キャンパス通信

図書館と私

元理事　松中修身

皆さんは二年または三年間の学生生活で、それぞれ学舎内に特別に好きな所や気に入った場所を、心に秘めておられる方もいるでしょう。私も、聖母女学院理事として短大に過去三二年余り関わりましたので、あの美しい学舎内には思い出深い場所があります。

難しい問題に直面した時、困難な問題の解決法で苦しんだとき、あるいは少し時間にゆとりが出来たとき等、よく一階西端のチャペルを訪問しました。祈りのためでしたがオルガンもよく弾きました。オルガンの響きを聴きつけて学生が入ってきたことも有りました。あの薄明りの中に充ちる静寂に、自ら癒されてゆく安堵感が好きでした。

しかし、私が一番気に入っていた場所は図書館でした。時間の許す限り図書館で過した時空こそ、私の沈思黙考にふさわしい場所でした。寡黙にコツコツと絶え間なく働く職員、笑顔と気配りを忘れないその人達、一番奥の窓寄りに腰掛けて、分厚い本を開き辺りを眺めると、落着いた室内の佇まい、学生達の真摯な面持ち、緑り豊かな窓外の景色、そのどれもが気に入っていたのです。

聖書の教訓書や予言書で、日頃詠むことの少い「格言の書」や「雅歌」、それに「エレミヤの書」や「哀歌」などに目を通して新鮮な驚きを経験しました。また、藤原定家の俳句からその波乱の生涯や、その時代背景となる平安時代を細かく学ぶ機会を得ました。更に、チベット寺院の曼荼羅についても深く学ばせていただき、それが大いに役立つこともありました。この様に人も場所も蔵書も全てが一体となって、私の人格形成に大きな影響を与え、今も図書館での思い出は私の中に鮮やかに生き続けています。

皆さんも、母校の一隅での出来事や思い出を、しっかり心に繋ぎ留めて頂きたいものです。聖母での幸せな日々を思い出しつつ…。

（平成九年六月三十日ご退任）

恵美ちゃんの笑顔を永遠に心に刻んで

国際文化学科副手　浅井聡子

去る平成9年3月22日、本学オラトリウムにおいて国際文化学科二期生、故貪谷恵美子さんの追悼・祈りの集いがしめやかに行われました。

貪谷恵美子さんは、在学当時英語習得に一生懸命勉学に励み、アメリカ合衆国英語研修旅行や留学生との交流会に積極的に参加。宗教的行事のミサには必ず出席され、クラブ活動においても茶道部に所属されるなど、勤勉で本当に明るく活発な学生さんでした。そして母校である聖母女学院短期大学をこよなく愛し、卒業後も何度か学校に顔を見せて下さいました。

その恵美子さんが1月16日ご病気でお亡くなりになられたという訃報を聞き、二期生である同窓生をはじめ、私たち国際文化学科教職員は、悲しみに包まれたのでした。

その後、二期生有志から、聖母短大が好きだった恵美子さんのために、母校のオラトリウムで追悼の祈りの会を行いたいと提案があり、国際文化学科長Sr.小川先生にご指導をお願いし、実現したわけです。

当日は恩師であるSr.小川英子先生、星宮智光先生、川嶋将生先生、里村元学生課長をはじめ、倉谷さんご家族、約20名の同窓生が祈りの集いに出席しました。その後、短大マリアンホール学生食堂において、二期生の集いが行われ、恵美子さんを忍びつつ、懐かしい学生時代の思い出話に花を咲かせました。二期生が再会し久しく集うのは、平成3年3月に卒業して以来はじめてのことです。この様な再会の機会がもてたことは、天に召された恵美子さんが、二期生を再び結び、めぐり会わせてくれたのだと信じています。

恵美ちゃんの笑顔を永遠にこころに刻んで…

二期生を再び結び、会わせてくれてありがとう。

ご冥福をお祈り致します。

期成会募金協力のお願い

平成五年に聖母女学院創立七〇周年記念事業の募金活動が発足いたしまして、来年二月に五年間の活動の終りを迎えます。募金趣意書並びに支援のお願いを送付させて戴きました。おかげ様で多くの方々の御理解を得て募金額も五億三千万円を越え、これまでに短期大学のマリアンホール、学院中高の新北館校舎、香里セミナーハウス、香里新プールが完成いたしました事は皆様に御報告いたしました。しかし目標達成率から見ますと短大同窓会はまだ低いレベルに留まっている実情です。老朽化した設備の更新、修繕、新たな機器の購入等々膨大な資金を必要としています。今までご寄付をお願いすることなく運営されていた母校ではございますが、迫りくる私学冬の時代を乗り切るために皆様のお力添えを御寄付を切にお願い申し上げます。

短大年間行事予定

4月	入学式
6月	創立記念日
7月	前期試験
11月	追悼ミサ 大学祭 推薦入試
12月	クリスマスの集い
1月	後期試験
2月	学力入試（一次）
3月	学力入試（二次） 専攻科入試 卒業式

平成10年度 入試のご案内

試験日程（3学科共通）

	試験日
1次 推薦選考	11月12日(水)
2次 推薦選考	11月30日(日)
1次 学力選考	2月5日(木)
2次 学力選考	3月6日(金)

詳細につきましては、学生募集要項を御参照下さい。

今どきの学生模様

生活三十三回卒　関公代

在学中の卒業式が近づいてきた頃、「はいからさんが通る」の主人公のような袴にブーツ姿で証書をいただきたいと思っていました。でも、制服があるからとあきらめた記憶があります。制服が廃止されて数年経ち、今年三月そんな小さな願望が実現する形となりました。以前のカトリック校を思わせる厳かな卒業式とは異なり、女子大学らしい華やかで明るいものでした。普段、跳ねっ返りだった学生も女らしくそして一回り大きくなって卒業していくように見受けられました。「制服が廃止された」ことは、入学式や卒業式の印象をがらっと変え、新しい時代の訪れを感じさせます。

新しいといえば、ここのところ巷でも人気のWindows95対応のパソコンが昨年後期から導入され、それに伴い今春生活科学科に専任の先生を迎え、一層の情報化を図ろうとしています。授業も、ワープロ、表計算以外にもインターネットを扱ったりホームページを作ったり、学生の物怖じしないでどんどん取り組もうとする姿は、見ていてとても嬉しくなります。

最近、学生の格好は、どこかで見覚えがあるとか、おもしろいファッションだとお思いの方がいらっしゃるのではないでしょうか。60年代.70年代ファッションなどと呼ばれていますが、彼女たちは、ちっとも「昔のもの」と思う様子もなく、どちらかというと、「昔のものが新しい」と言わんばかりに、上手に、違和感なく着こなしています。

淡々と過ぎる日々の中で、時折垣間見るそんな「新しさ」を静かに見守る今日この頃です。

いよいよ卒展20回

児童教育学科助手　山成昭世

卒業生の皆さん、お元気ですか。毎年恒例の児童教育学科・美術科研究室主催による卒業作品展が平成10年度に20回を迎えます。ひとくちに20回と言いますが生まれたばかりの赤ちゃんが成人式を迎えるようなもの。こちらは中原先生と青息吐息の連続ですが、美術科非常勤の先生方の献身的なご助力に支えられ、毎年開催されている次第です。卒展は児童教育学科10期生から始まっており、案内状も10期生から毎年送付していますが、10期生以前の同窓生の方も20回展には新しい母校の見学を兼ねて、御来場下さい。同時に、卒展と並行して開催されます『保育講座』にも20回展を記念した講師を招待しようと計画中です。

会期は次のようになっています。

第20回卒業作品展会期

平成10年2月9日～11日

詳しくは美術科研究室までお問い合わせ下さい。（内線352）

平成8年度会計報告

収入の部 科目	金額	支出の部 科目	金額
同窓会会費		同窓会名簿印刷費	267,800
生活科学科	1,350,000	卒業生記念品代	275,008
児童教育学科	1,730,000	同窓会会報代	365,135
国際文化学科	960,000	印刷代・コピー代	1,495
		通信費	755,170
		慶弔費	39,201
		振込手数料	2,177
		アルバイト代	57,189
合計	4,040,000	合計	1,763,175

＊詳細は会計井上初美まで

●平成8年度各学科役員紹介

○生活科学科（34回卒）

生活科学専攻

A 池田典子　伊藤さや子

B 長谷川環　増田久美

食物栄養専攻役員

阪口友紀　宮元裕巳

○児童教育学科（28回卒）

A 加地智恵　佐野朋子

B1 巽美佳　濵中厚子

B2 塚田直子　土壁一恵

B3 河上智香　平手綾子

B4 野田郁　野田富美

○国際文化学科（7回卒）

A 五十嵐和美　上田陽子

B 大川明子　大谷幸子

C 辻佐和子　吉田好江

編集後記

創刊号発行よりはや一年。これからも同窓生の心のかけ橋となる会報誌作りをしたいと思います。今年の夏休みは原稿締切に気をせかされ、バカンス計画とやりくりをする毎日でした。

Y・A